

# 週刊 教育資料

2013年8月26日号

No.1264

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION

<http://www.kyoiku-press.co.jp>

## >>> 好評連載



### 教育の紛争【ボールを避け転倒し、後に死亡した事例】

梅澤秀監／東京都立雪谷高等学校(定時制)主幹教諭



### 現場の課題に応える教育センター【「学び続ける教師像」の確立】

岸豊／北海道立教育研究所長



▼資料【体罰の実態把握について(第2次報告)(概要)】  
◎文部科学省

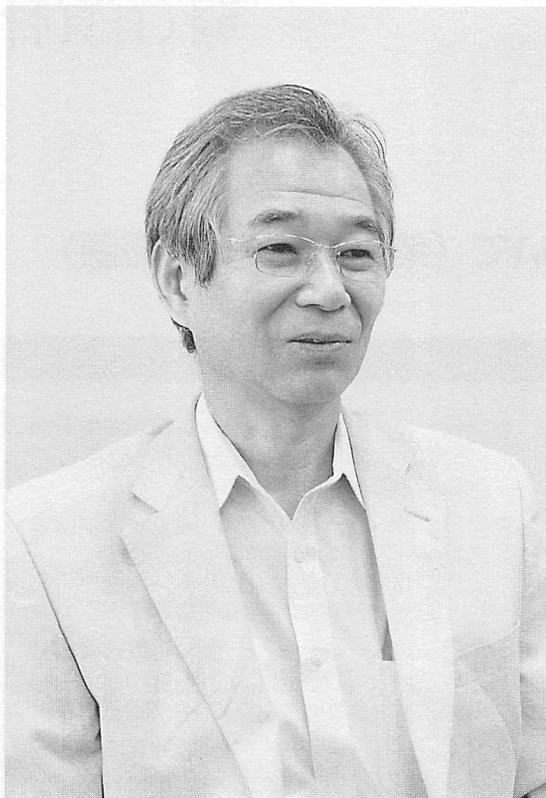
▼マイオピニオン【合理的配慮だけでは社会参加できるようにはならない】  
◎品川裕香／教育ジャーナリスト

▼自著を語る【学習事業成功の秘訣！ 研修・講座のつくりかた】  
◎佐藤晴雄／日本大学教授

▼潮流【学生が集い地域と連携する図書館に】  
◎山本健慈／和歌山大学学長

#### 山本健慈

やまもと・けんじ◎1948(昭和23)年生まれ。山口県出身。京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。1977年に和歌山大学に着任し、1995年から同大学教育学部教授。同大学生涯学習教育センター長、副学長、サテライト部長などを経て2009年8月から和歌山大学学長。1988年以來「大人が育つ保育園」といわれるアトム共同福祉会保育園に関与。



## 山本健慈氏に聞く ①

和歌山大学学長

潮流◆題字奥野誠亮

# 潮流

## 学生が集い 地域と連携する図書館に

大学改革を通して、地域特性を  
踏まえた図書館づくりに力を入れた。

学ぶ動機や職業意識を学生は  
地域体験でつかんでいく、という。

### 図書館を連携の場に

——大学改革の方向性を分かりやすく示した資料「和歌山大学物語」の中にある「クロスカルセンター」構想とは、どういうものですか。

「クロスカル」とは、大学附属図書館を改革し「教養・文化・国際・地域資源・人材などの『ローカル&カルチャー』が『交流（クロス）』することで、新しい価値が創造される場所へ」という思いを込めた造語です。図書館改革のために招いた日本の図書館界の改革の旗手である、渡部幹雄特任教授・現図書館長が命名しました。大学の図書館は蔵書収集と保存、研究者への学術情報の提供という役割がありました。が、それにとどまらず、学生が集い、世界や和歌山県の豊かな地域特性とも連携していく場にしていく、というものです。

例えば、図書館の1階は「コモンズ（共用空間）・出会いの広場」と位置付けていますし、2階は「教養の門・知識の交差点」として、調査相談や教養を深める場になっています。3階は講座やアクティブラーニング、論文指導などを行う「企画・発信・交流」の場に、4階は語学ラボ、教養研究室などがある「『教養の森』センター」としています。

——どういう成果や効果がありますか。

例えば、「和歌山大学物語」のコンセプトの一つである「地域で鍛える」という点では、学生自身が「日本の大学生は勉強しないというが、問題は学ぶ動機に乏しいことにあるのではないか。地域の農村などに出席してみると、そこでの問題解決には中学や高校で学んできたことが少しも役立たないことが分かった」「地域の問題を考えることで、大学で学ぶ動機をつかめた」と話しています。

授業以外の課外活動であっても、例えば大きな規模のスポーツ大会などを学生が運営するという活動も、プロダクトマネジメント（商品管理）の力を培う場になります。アルバイトなどの就業経験も含め、そこでどういう学びや経験をしているかに、大学としてもっと注目すべきであると思います。学生を一元的なレールに乗せて教育する時代ではなくなっています。大講義形式の授業が「苦手」という学生もいれば、少数のゼミでは「緊張してしまう」という学生もいます。結局、学生一人ひとりに対する個別の対応が求められるのです。最終的には自律的に選択する力を学生が身に付けることが重要ではないかと考えます。

## 教員養成でも地域らしさを

——和歌山大学には、教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部があります。

例えば、教育学部で特色あるプログラムとはどういったものですか。

教員養成の課程でも、「地域（和歌山）らしさ」を出すことが必要と考えます。本学の教育学部では11年前から、希望者を対象としたホームステイ型教育実習（期間は2週間）を実施しています。これは通常の附属学校での教育実習とは別に、県内の地域の家庭にホームステイしながらその地域の学校で実習をするというプログラムです。地域にあるお寺やPTA会長の自宅、元校長の自宅などにホームステイします。

2011年9月に、和歌山県では大水害で児童が亡くなった地域がありました。実習は翌年2月から始まる予定でしたが、地域全体が被災しているので実施は無理だと思っていました。しかし、その地域から「地域を挙げて取り組む。復興のためにもぜひ実施してほしい」と要請がありました。地域住民共有の事業になつていのです。

この実習は参加する学生のひとりの付き合い方や、価値観をも変えます。和歌山県南部の山村でホームステイ実習を体験した大阪府堺市出身の学生は、前日にあいさつ回りをした時には出会わなかった地域の人から、登校初日に声を掛けてもらったそうです。その学生は「生まれてから一度も地域の人とあいさつをしたことがなかったし、自分も引っ込み思案で話するのが苦手だった

が、見知らぬ地域の人から声を掛けてもらい、自分からもあいさつが自然にできた」とうれしそうに話していました。さらにこの体験を「日本語が通じる留学だった」と言っていました。本人にとつてはまさに「異文化体験」だったのでしよう。

また、他県の出身ですが「卒業後は和歌山県の教員になろう」と決意した学生もいます。こういう体験を通して、教育実習生が教職を目指す明確な目的や動機を持つようになり、教員採用試験でも好成績を収めています。

——高校までの教育関係者や教育委員会などとの連携も重要ですね。

誕生してから大学を卒業するまでの20数年間にわたる「育ちのプロセス」を点検し、教育関係者が問題点を共有するところから、教育改革の問題を考えていく必要があるのではないのでしょうか。特に地域の国立大学は、学生の学校歴および育ちの中での課題を整理し、地域の教育関係者に提起し、18歳まで彼らに関わる関係者の在り方について対話的に研究する中心になることが必要だと思えます。

こうした議論を積み重ねれば、人生において最も多感な時期である10～15歳くらいまでに地域のさまざまな人との豊かな出会いを経験しておくことが、これからの時代を生きる日本の青年たちには必須のこと

あると分かり、小・中・高校時代、さらに言えば保育園、幼稚園時代に何が必要で、何が必要でないのかが明確になるでしょう。

学生を見ていると、漠然とはあってもこれまでの約18年間の育ちの中で経験していることが土台となり、大学のさまざまなプログラムが一つのきっかけとなって、社会に大きく視野を広げていく様子がうかがえます。ただ、全員がそういう状態とはいえません。きっかけとなる「火だね」が十分に育っていない学生もいます。

こうした学生も含めて、中・高校生のころにどういう体験の場が必要なのか、大学の関係者と中・高校の現場の先生方とがもつ情報交換すべきだと思います。特に小・中学校の先生方を見ていると、保護者も含めた社会からの一方的な圧力を受けて、本来、力を入れるべき分野ではないところで、「多忙化」に追い込まれているように感じることがあります。高校・大学受験などの「圧力」も、本来の学校教育をゆがめています。大学関係者や行政関係者も含めて、20数年間の育ちを大きな視点から議論することが大切です。

## 保護者にも率直に問題提起

——学長として、保護者への働き掛けはどうされていますか。

私は学長として入学式の中で、学生だけ

でなく、参加している保護者に向けてもメッセージを発してきました。入学式後に、参加した保護者に集まっていたき、後援会の総会をしています。毎年、300〜400人の新入学生の保護者を前に、大学として「学生の『過去の人生』も応援したい」というメッセージの理由を解説しています。

保護者には、学生や親自身の育ちも含めて、私が問題と感じていることを率直に話すようにしています。例えば、自分で願書を書かずに親に書いてもらう学生がいること、合格後に入学金を払う大学の窓口で、「取りあえず入学しなさい」という親と「嫌だ。来年希望校を受験したい」という子どもがもめている様子などリアルなエピソードも交えて話し、考えてもらいます。自分で人生を切り開いていく生き方への応援を大学だけでなく、保護者の方にも理解し、協力していただきたいからです。こうした機会を利用して、保護者の方と大学関係者とが本音で話し合う「熟議」のような場を設けることも考えられます。

——学生に対してはいかがですか。

新入学生には、入学式の時のあいさつのほかにも、5月上旬の進路指導の授業で、入学式の時の話をもう一度、詳しく話すようにしています。「和歌山大学があなたたちの人生を応援するとはどういう意味か」を説明すると、学生も自分の人生について

振り返り、考え直すようになります。授業を受けた学生のレポートを読んでいると、これまで考えたこともなかった自分の人生について考え始めた様子が分かります。入学直後に少人数で「自分の人生」「何を幸せだと思おうのか」を考え合う場を持つこと、それにしっかりと付き合える教員の幅広い見識と態度が大切です。

——大学という組織体の経営で大切にしていることは。

学長として、幹部層の教職員、新任教職員に対して、就任以来、繰り返し大学のミッションや「生涯、あなたの人生を応援します」という本学の基本姿勢の意味を語り続けてきました。「あなた」とは、学生だけではなく、教職員の人生も、地域の方々への人生も応援するという経営者としての姿勢です。この中で大学教職員全体の自発的意欲が高まり、教職員から改革についての提案が出されるようになりました。こうした議論、作業の積み上げの中で、次の本学経営幹部が層として形成されつつあると思います。

政府や中教審などで学長のリーダーシップの発揮が盛んに指摘されていますが、学長個人の力というよりは、その大学のチームとしての力量が発揮できる体制づくりが重要であると思っています。

和歌山大学 = <http://www.wakayama-u.ac.jp/>